

師父 聖哲 巨匠 達人 泰斗

澁谷 繁樹



今年の前半はすっ飛んで過ぎた。薩摩川内市は東郷町に住む知り合いの猟師さんが本を出したいというので、出版社との下準備、原稿の下見、出版したらしたで、祝賀会の用意から進行まで、切れ目無く追いまくられて、気づいたら七夕も過去だった。

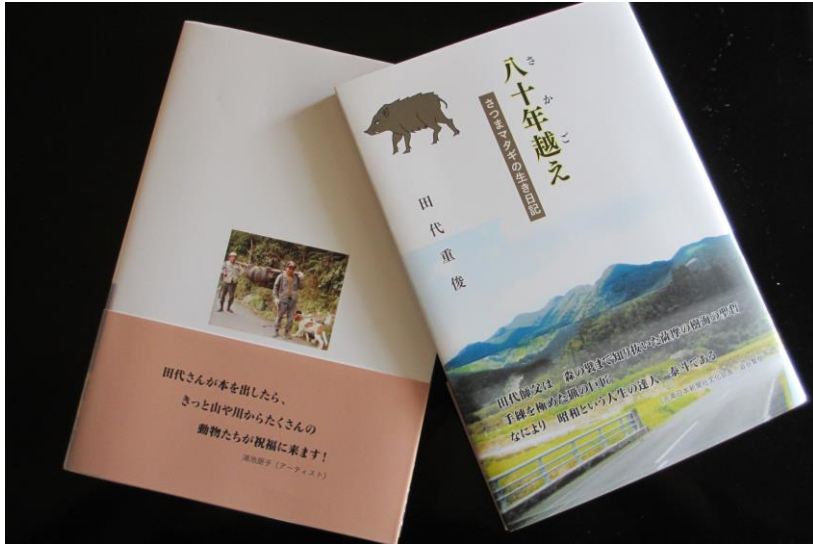
猟師さんは、藤川天神からもうチョイ山に分け入った本俣の田代重俊氏。八十三歳と聞かされてもウソデショと言いたくなるくらい壮健、お酒もビールで勝負となると歯が立たず連戦連敗が続いている。

猟銃は持っていくけれども、とどめを刺す

だけにしか使わない。細い針金でこしらえた小さな小さな罾で、イノシシ、シカを捕まえる。おそらく鹿兒島では比類のない知恵と経験と実績を積んだ罾猟師と機会ある度につぶやいていたら、聞きつけた出版社数社からぜひ本にしましょうやともちかけられ、そのうちにねと長く寝かせているうち、ご本人が八十歳も越えたしなあと書く気に傾き、それはなによりと背中を一押ししたら、短歌をたしなんだりの素養があるせいだろう、読みやすくしておもしろい一代記が出来上がり、祝賀会も弾みに弾んだ。

頼まれて本の帯を書いた。「田代師父は森の襷まで知り抜いた薩摩の樹海の聖哲 手練を極めた猟の巨匠 なにより昭和という人生の達人 泰斗である」。師父は師匠でもあり父でもあり、聖哲は聖人、哲人の総称になる。

泰斗は、大きく高く聳える山。聖哲、巨匠、



田代重俊巨匠の一代記「八十一年越（さかご）え さつまマガギの生き日記」



ヤマタロウは別名モクズの謂われとなったハサミの毛もしゃぶり尽くす



罾にかかったシカはとどめを刺されるまで猟銃の銃口を見つめて目を閉じない

達人、泰斗、字面はオオギョウだけれども大げさな褒め言葉ではない。

巨匠は言う、樹海には銀座通りも裏道も脇道も国道も小路もある。道を見極めて罾を仕掛ける。後は山の神の裁量に任せる。とれてもとれなくても山の神の意志になる。山や川での小用の際は必ず合掌と感謝の言葉を欠かさない巨匠は、神様もお気に入り、罾は百発百中に近く、二百キ近い猪を四人がかりで山から運び出した冬もある。猟に同行したら、見回った十カ所の罾にはすべて獲物がいて、もう解体も面倒くさくなつたな、逃がしましようか、と何匹もお山に帰ってもらつたりもしている。

本の帯は現代美術の鴻池朋子さんも書いている。「田代さんが本を出したら、きっと山や川からたくさん動物たちが祝福に来ます！」。毎年、かなりの数の身内が巨匠に捕まっ

ている連中だから果たして祝福か、恨み節じやないか、と言いたくなるくらい山の巨匠は川の達人でも鳴らす。ウナギ然りヤマタロウ然り。アユも逃さない。

ヤマタロウは別名モクズの謂われとなつたハサミの毛をしゃぶるとうまいんですよ、イノシシは鞆丸が最高で食べた後となるとそりやもうアナタ、イノシシは胆嚢を干すところがまた効能抜群の精力剤で、シカは刺身が一番です、食べ過ぎたらセンブリを煎じて飲めば、一発でなおります。

コンビニがやたら目立つ鹿児島でも、まだ野生に富んだ知識を教える巨匠や名人がいてくれる。田代聖哲に後継者はいない。折角の名人芸が途絶えてしまうのは惜しい気がするけれども、消えて行く背中に嘆きの言葉ばかりをかけてもいられない。

海、空、陸の行き来に支障が出れば、電気

が停まってしまえば、水が出なくなってしまう、例えば、美食もヘッタクレもない、たちまち食べられなくなってしまう食糧自給率四割もない島国の生活を建て直す方が、先の話だろう。テレビでどここの寿司がなんてやってる場合じやないんじゃないですか。

(元新聞記者)

